

4. 記念式典スピーチ

グローバルな会計基準に向けての
見解

国際会計基準審議会 議長 Hans Hoogervorst



中塚大臣、萩原理事長、賓客の皆様。本日ここに国際会計基準審議会（IASB）にとって重要なこの行事に参加でき、大変、光栄に感じています。本日、私たちはロンドンの外での最初のオフィスを開設しようとしており、アジア・オセアニア地域はこの施設にとって完璧な場所です。ですから、私は本日ここにいることを嬉しく思っています。財務会計基準機構（FASB）におかれましては、このオフィスの設立に多大なるご支援をいただいたことに感謝するとともに、私はオフィスの設立が注目すべき成功なることを皆様にお約束したいと思います。

まず第1に、アジア・オセアニアは世界中で最もダイナミックな経済地域です。IASBにとって、この地域の多くの法域と企業が世界中の投資者と対話するために私たちの会計言語の使用を望んでいるということは名誉なことです。IASBがここでの拠点を必要としているのは、私たちが開発している財務報告基準がこの重要な地域のニーズに十分に適合することを確保するためです。

第2に、財務報告の分野において、アジア・オセアニアには本当に賢い思考をする人たちがいます。IASBにいる私たちは、常にこの地域から寄せられるコメントレーターや他のインプットに期待をしています。

私たちは、このインプットが非常に高品質で、非常に明確な考えを示すものであると信頼

しています。私たちは彼らの意見や考えをこのオフィスを通じてもっとよく吸収する必要があります。

アジア・オセアニア地域には、多様性に富んだ25の独立した意見があります。アジア・オセアニア会計基準設定主体グループ（AOSSG）が行っている素晴らしい仕事は、これらの各国の見解を統合するのに役立っており、可能な場合には、IASBに対してアジア・オセアニアの見解を示すことにもつながります。このオフィスがこの地域での協力とコミュニケーションをさらに深めることに貢献することを私たちは真に望んでいます。また、私たちは、IASBの日々の活動の中でアジアにおける意見や考え方が十分に検討されることを確保するためにも、ここでの活動が必要となります。

アジア・オセアニアオフィスは、IASB自身がこの地域でより適切に理解されるのにも役立ちます。私たちは比較的若い組織ですので、この点で行うべきことがまだたくさんあります。世界中を頻繁に行き来する中で、私が気付いたのは、IASBに関して解く必要のある誤解がまだ数多くあるということです。私が今ここにいるので、この機会を利用してこれらの誤解を解きたいと思います。

IASBについて常に持たれている誤解の1つは、私たちが（おそらく密かに）公正価値だけに関心を持っているというものです。真実はといえば、私たちは常に混合測定モデルの支持者

でした。米国財務会計基準審議会（FASB）にいる私たちの仲間は一時、金融商品について全面公正価値モデルを提案したことがありますが、IASBは最初から混合属性モデルの方が適切であろうと判断しました。公正価値測定は活発に取引される金融商品については非常に目的適合性がありますが、製造企業にとっては、有形固定資産を公正価値で評価することには通常はあまり合理性がないということを私たちは十分に理解しています。

現在、私たちは、概念フレームワークの公正価値の章の見直しを行っています。私たちは、どの測定技法をどのような状況で使用するのかに関して、明確な原則の開発を試みるようになります。いくつか非常に難しい問題があり、この実践の結果は明らかではありません。しかし、最もありそうにないのは、単一の測定技法として公正価値を選択することです。ですから、公正価値に関する誤解は解くことができたいと思います。

第2の誤解は簡潔に触れたいのですが、IASBは貸借対照表にしか関心がなく、純利益を包括利益で置き換えようとしているというものです。ここでも、そうした偏りの証拠はありません。私たちは、貸借対照表や損益計算書に関して、一種類の情報を財務報告の主要な焦点として指定することはしません。両者は真に補充関係にあるのです。私たちは、稼得利益も重要な業績指標と考えています。包括利益は利用者が別々に分析する必要がある多くのさまざまな項目を含んでいることを私たちは知っています。

そうはいつても、異なる利得及び損失を異なる方法で報告する根拠を明確にする必要があることも承知しています。「その他の包括利益」は、微妙な会計の問題に対する非常に混雑した駐車場となってきました。実のところ、「その他の包括利益」が実際に何を意味しているのか



誰にも分かりません。私たちの任務は、これを整理して、利益に関する表示をもっと有意義なものにすることです。概念フレームワークの見直しの中で私たちはこれを試みる予定です。私たちの幸運を祈っていただきたいと思います。

ところで、私たちには業績の測定値としての純損益を廃止したり、包括利益を唯一の業績指標としたりする計画はありませんのでご安心ください。ですから、ここでも、事実はフィクションとはいくらか異なっています。

先ほどの2つの誤解は第3の常に持たれている誤解につながっています。すなわち、IFRSが有用なのは、ロンドンとウォールストリートの金融の若手実力者にとってだけだということです。この誤解は、私たちの基準は強い製造業の伝統をもつ国々の文化に適合しないと考えるものです。ここでも、これは事実ではありません。世界中で、IFRSを使用している企業の大多数は、通常の事業活動を行っています。例えば、製造、小売、サービスのセクターなどです。2007年に発生した世界的な金融危機以来、IFRSに関するメディア報道は、IFRSが金融機関にとってどういう意味を持つのかで占められてきました。メディア報道はそうでも、事実

としては、IFRSは「実体経済」の企業が日々使用しているものなのです。

私が触れたい第4の最後の誤解は、IASBが時には、遠く離れたロンドンでアングロサクソンが支配している現実離れした象牙の塔だと認識されていることです。幸いにして、この批判は軽減されそうです。私たちが世界中の関係者と接触する取組みを強化しているからです。

実際のところ、IASBは外国の組織ではなく、真に国際的な組織なのです。私たちには世界中からのスタッフとボードメンバーがおり、彼らは公益に深く尽力しています。私たちの使命は1つだけです。世界中の関係者に役立つ高品質な会計基準を開発することです。私たちは基準を設定する際に世界中の法域からのインプットに大いに依拠しています。各国の基準設定主体やAOSSGなどの地域団体との私たちの

関係は、まもなく会計基準アドバイザー・フォーラムの創設によって深められることになるでしょう。

アジア・オセアニアオフィスの開設は、大きな象徴的な意味を持つもう一つの瞬間です。これは、真にグローバルな組織になるというIASBのコミットメントの証でもあるのです。皆様は、この非常に重要な地域とその関係者に対する私たちの継続的なコミットメントに期待していただいいてよいと思います。最後に、すべての日本の当局とFASBに、このオフィスの設立にご協力いただいたことに改めて感謝いたします。

※ この原稿は、11月15日に開催されたIFRS財団アジア・オセアニアオフィス開所記念式典での講演を翻訳したものです。